談話室

拡大する農学と教育

過日，農林中金主催のセミナーに参加させていただいた際にオランダ人の講師と名刺交換をする機会を得た。東京「農業大学」という，そのものズバリの名称と，10,000人以上の学生が学んでいることを紹介させていただいたところ，講師からは，「日本の農業の将来の大きなポテンシャルですね」というお言葉をいただいたが，果たして本当にそうなのか。

そのオランダには，農学とその関連分野の研究・教育を行うワーヘニンゲン大学がある（実際には大学だけではなく農業および関連分野に関わる研究機関も一体に運営されている）。私も2004年夏から１年間学ぶ機会を得たが，その頃オランダに注目していた日本人は，以前から競争力の高かった施設園芸や酪農の関係者くらいだったであろう。その後，フードバレーやスマートアグリが大きく取り上げられるようになり，日本から多くの政治家，研究者，ビジネスマンがオランダに押し寄せたのは周知のとおりである。ワーヘニンゲン大学も，もとは地方の農業学校から出発し，農業の高等教育の重要性の高まりを背景に農業大学となり，HPによると1999年に「農業」をはずした現在の名称となると同時に，「従来の農学」に食品科学や環境科学などもとりこんだ現在の組織の原型がつくられた。本学も98年に，農学部から食品・化学，工学・環境，経済・ビジネスの分野がそれぞれ独立し４学部となった。はからずも同じ頃，２つの農業大学は農学の範囲の拡大に乗りだしたのである。ワーヘニンゲン大学と関係研究機関のキャッチフレーズが「Quality of life」であるのをみてもわかるように，農学は生活の質を向上させるためのあらゆる科学ということになった。

現在，本学の学部学科で「農」を冠しているのは１丁目１番地の農学部農学科のみである。私の所属する学科も含めて，学問分野の細分化や多様化に対応した様々な名称がつけられており，それらは一般的には理解しづらいものとなっている。農学の拡大の一方で農業という産業，まして農業経営のことを体系的に学び体験する機会は少なくなってしまった。私の所属する学科は，開学以来の農業経済系学科の伝統ともいえる学外実習を必修科目とし，農業に加え，食品ビジネスなど関連産業の現場へ学生を派遣している。とかく机上の議論になりがちである経済系の学生にこそ現場での体験が必要という考えに基づいており，研修先の多

農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/

くは本学の卒業生もしくは教員の個人的なつながりから開拓してきた。遠くは現地在住の卒業生のお世話でブラジル，パラグアイ，アルゼンチンの南米各国にも派遣している。学外研修を通じてはじめて「農大に入った実感がわいた」という学生の感想が聞こえてくると，研修受入先の農家は「大学では何を教育しているのやら」と顔が曇る。

本学では来年４月に生命科学部を開設する予定であるが，同時に短期大学部が募集停止となる。本学では，農業を中心に各界でトップクラスの経営者として活躍している卒業生に毎年東京農大経営者大賞を授与するとともに，教育・研究にご協力をいただいているが，農業経営での受賞者は短期大学部の出身者が少なくない。後継者教育を担ってきた短期大学部がなくなるということは農業経営の実務家，経営者を育てるという点では一歩後退することになる・・・。

このようなことを思ったのは，「談話室」（５月号）に投稿された堀口健治先生（日本農業経営大学校校長）による直球農業者教育を拝読させていただき，大学での農学教育がどこに行くのか考えさせられたからである。オランダ人講師のコメントに立ち返ってみると，本学のみならず，日本全国には農業・食品およびその関連分野の教育研究を行う学部学科は数多くある。それらの卒業生が本当に「日本の農業の将来の大きなポテンシャル」になるのであれば，大挙してオランダに押し寄せる必要もなくなるであろう。

周知のとおり，オランダでは大学での農学教育と農業者育成教育とは区別されているため，ワーヘニンゲン大学も農業者を輩出するわけではない。しかし，大学で得た知識・技術・ネットワークは，農業・食品製造技術の革新，農業・食品分野で起業，コンサルタントや情報技術など経営支援の発展などをとおしてオランダの農業・食品産業の発展に寄与してきたことは間違いない。日本においても農学教育と農業者教育の場の分離がおきようとしているならば，本学にも，拡大してきた農学の様々な研究分野の知識・ノウハウを集積してネットワーク化し，農業・食品および関連産業に一層貢献できる可能性をもった人材の輩出が求められることになる。

（東京農業大学 国際食料情報学部 国際バイオビジネス学科
准教授　井形雅代・いがた まさよ**）**

農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/